(『国語学』第51巻2号　2000・9・30)

文　法（史的研究）

高山善行

1. はじめに

1998年・1999年（平成10・11年）期の研究を展望する。1900年代としては最後の展望期間である。現在までの研究の流れについては，既にいくつかの総括がある[注1]し，今は紙数の余裕もない。さりとて，この節目の時期に，黙ってやり過ごすわけにもいかないので，研究の現状について思うところを述べ，ささやかな話題提供としたい。

―― はたして，文法の史的研究は発展しつつあるのか？

この疑問が，展望執筆を引き受けて以来，評者の頭から離れない。何をもって発展とみなすかは，文法観，学問観の違いによって人それぞれであり，容易でない。だが，世紀末の今，しばし考えをめぐらせてみるのも全く無意味ではなかろう。

現在，解釈文法から記述文法への移行が進みつつある[注2]。これは発展と見てよい。解釈文法には良さもあるが，この方法だけでは言語の研究たりがたい。また，索引類の整備，テキストの電子化により，文献検索・用例検索・データ作成の効率化が進んでいる[注3]。経験的な部分を疎かにしないなら，これも間違いなく一つの発展であろう。粗っぽくまとめてしまえば，前者は「研究方法の発展」，後者は「研究技術の発展」と言えようか。

しかし一方で，新しい規則，法則が次々と発見されたという事実は認めがたく，過去に提起された問題（言語現象の説明）についても，事実上先送りされている。結局，この分野の研究は，「着実に発展しつつあるが，残された課題も多い」という，意外性のない結論に落ち着きそうである。

さて，読者諸賢は，いかがお考えだろうか。

この展望では，研究の発展につながる，「新しい視点」「新しい発想」を中心的に取り上げていきたい。これは，手堅い研究の価値を認めないというわけではなく，あくまでも優先順位の問題である。論考を採り上げる際には，「新規性」「継承性」「実証性」「論理性」「明確性」「形式性」（郡司隆男・坂本勉『現代言語学入門①　言語学の方法』p.231，岩波書店，1999.5）を一応の目安とした。

2. 研究書・論文集・雑誌特集号

今期，文法史に関わる研究書が多数上梓された。すべてを挙げ尽くせないが，たとえ

ば，蜂矢真郷『国語重複語の語構成論的研究』（塙書房，1998.4），金沢裕之『近代大阪語変遷の研究』（和泉書院，1998.5），加藤浩司『キ・ケリの研究』（和泉書院，1998.10），蜂谷清人『狂言の国語史的研究――流動の諸相』（明治書院，1998.12），坂詰力治『国語史の中世論攷』（笠間書院，1999.1），鈴木泰『改訂版　古代日本語動詞のテンス・アスペクト――源氏物語の分析――』（ひつじ書房，1999.7），工藤力男『日本語史の諸相　工藤力男論考選』（汲古書院，1999.8），Karen. E. Sandness "The Evolution of The Japanese Past and Perfective Suffixes"（Michigan Monograph Series in Japanese Studies 26,1999.7）などである。すでに書評が出ているものもあり，改めて評するのは，屋上屋を架することになろう。ここでは書名だけにとどめる。

論文集の刊行も盛んであった。以下に書名を挙げ，便宜略称を付す。『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』（汲古書院，1998.2）＝東大論集，『森重先生喜寿記念ことばとことのは』（和泉書院，1999.2）＝森重記念，『井手至先生古稀記念論文集国語国文学藻』（和泉書院，1999.12）＝井手記念，『国語語彙史の研究』17，18（和泉書院，1998.10，1999.3）＝語彙史17，語彙史18，『国語論究7　中古語の研究』（明治書院，1998.12）＝論究7，『文部省科学研究費成果報告書　明治時代の上方語におけるテンス・アスペクト形式――落語資料を中心として――』（研究代表者，金沢裕之，1999.3）＝上方語，などがあった。英語論文では，Toshio Ohori edit. "Studies in Japanese Grammaticalization ――Cognitive and Discourse Perspectives――"（Kurosio Publishers, 1998.3）があった。

雑誌特集号では，『国文学　解釈と教材の研究』（特集「これだけ文法が分かれば古典が読める」，43-11,1998.10）があった。野村剛史「「の」と「が」＝主格と連体格の分化」，金水敏「「あり」「ゐる」「をり」＝存在の意義の表現」，釘貫亨「「ゆ・らゆ」＝なぜ受身・自発・可能など多義なのか」などがあり，各テーマの研究の先端部を知ることができる。また，「新しい古典文法のキーワード」は，現在の理論的研究についていけているかどうかチェックできて，重宝する。『国語学』（196,1999.3）では，「国語史研究の方向」という特集を組み，文法史関係の論文を収める。

3.　研究論文

3.1　構文（「係り結び」など）

構文研究では，いくつか新しい視点が見られた。

青木博史「中世室町期における「動詞連用形＋ゴト構文」について」（『国語学』198,1999.9）。「語から句への拡張」という視点から，「連用形＋ゴト」名詞句について論じている。従来の文法史研究は，語を対象とする研究に偏っていたが，今後はもっと句（特に名詞句）を重視すべきである。この論文は進むべき方向性を示唆していると言えよう。ただ，「例示一般化」（語用論に関わる問題とする理解は正しい）は，興味深い問題だけに，もっと掘り下げてほしかった。助詞ハや文構造の理解については，現代語研究を参照する点はよい

が，やはり古典語での観察が必要ではないか。近藤泰弘「接続助詞と準体句」(『国文学　解釈と教材の研究』43-11,1998.10)。小松英雄のいう「連接構文」を生成文法や言語類型論(linguistic typology)の観点から検討する。動的意味論(dynamic semantics)の展開からしても，「連接構文」は注目すべき構文であり[注4]，文法研究のパラダイム転換が期待できる。小柳智一「中古のマデ――第一種副助詞――」(『国語学』199,1999.12)。著者は，古代語の副助詞の研究を精力的に進めており，この分野の研究を活性化した点を評価したい。この論文からは教えられる点が多いが，問題もある。最も重要な問題点は，マデに上接する句を語と同様に処理している点である。語と句の平行性は当然あろうが，句の独自性を簡単に切り捨ててよいか(用例28を掘り下げてみよ)。そこを詰めずに語の側に引き付け，マデの接尾語性を主張するのは無理がある。

係り結びに関する研究は今期も多かった。

近藤要司「係助詞の複合について(三)――『万葉集』のハモについて――」(『金蘭国文』3,1999.3)。ハモの文中用法，文末用法を取り上げ，ハヤ，ハヨ，カモと比較しながら論じている。個々の係助詞の特性を考えるとき，複雑であるかに思える複合用法の方が，かえって見えやすい面があることに気づかされた。ただ，文末ハモに上接する要素が連体句を形成するのか，名詞の前で切れているのかは微妙な場合がある(たとえば，六頁第七例)。事態の眼前性について言及するが，いわゆる「メノマエ性」との関係も知りたい。同「係助詞の複合について(二)――万葉集のヤとヤモの比較――」(『金蘭国文』2,1998.3)もあった。小田勝「係助詞に対する過剰な結びについて」(『国学院雑誌』99-1,1998.1)。例外的現象を通して，典型的な係り結びとは何かを問う。袋小路現象(garden-path phenomena)の観点を導入してみてはどうだろうか。森野崇「奈良時代の係助詞『も』に関する考察」(『二松学舎大学論集』41,1998.3)。モの結びについての観察が興味深く，モダリティ論にも有用である。

係り結び研究では，「どの範囲を係り結びと認めるか」という基礎論が重要と思われるが，その議論が決定的に不足している。川端善明「係結の形式」(『国語学』176,1994.3)が出発点となろう。

構文解析の方法については，こまつひでお「日本語進化のメカニズム――環境への適応としての言語変化――」(『国語学』196,1999.3)が重要である。著者は，「現実のディスコース」における言語情報処理のプロセスに沿った構文解析を提唱する。心理言語学(psycholinguistics)でいう文処理(sentence processing)の発想であり[注5]，古典語の構文解析，特に「係り結び」に応用する視点は新しい。従来の文末偏重主義に対する批判も的確である。ただ，アリの形態面の特殊性を連用中止の運用効率から説明する点は説得的でない。そもそもアリを動詞として議論を始める必要があるのだろうか。国文法の規範から脱し切れてないのではないか。

3.2　テンス・アスペクト

この分野では，現代語のテンス・アスペクト研究の方法（工藤真由美に代表される）を応用した研究が着実に成果を挙げている。一方で，伝統的な方法を継承する研究もあり，方法論の相対化が求められている。

鈴木泰「宇津保物語における基本形のテンス――古代語のテンスにおけるアクチュアリティーの問題――」（『国語学』196,1999.3）。基本形のテンスをアクチュアリティーの面から分析している。テンス論だけでなく，モダリティ論（モゾ，モコソの問題など）にも有益である。基本形の記述は，これからも積み重ねていかねばならない。同「助動詞からのぞかれるべき「けり」について」（東大論集）もある。他には，黒田徹「万葉集における動詞基本形の意味・用法」（日本語文法研究会『研究会報告』20,1999.3），吉田茂晃「中古期仮名文における〈タリケリ〉について」（『山辺道』43,1999.3），広坂直子「近世後期の並起表現――反復形式からナガラ形式へ――」（上方語）が注目された。

今期，文法研究と文体研究とを繋ぐ立場の論が目立った。これからもこの方向は進めてほしい。

西田隆政「源氏物語における助動詞「ぬ」の文末用法――場面起こしと場面閉じをめぐって――」（『文学史研究』40,1999.12）。現代語のアスペクト研究を参照し，場面構成において，助動詞「ぬ」がどう働くかを論じる。新しい理論的な方法と伝統的な方法とを融合させようとする点がよい。ただ，何をもって一つの「場面」とするかの議論が今後必要であろう。藤井俊博「冒頭句「今は昔」と「けり」叙述――宇治拾遺物語を中心に――」（『表現研究』70,1999.12）。先行研究の的確な整理，批判をもとに論じられ，手堅さを感じさせる。説話文学の研究にも有用であろう。

3.3　モダリティ

現代語のモダリティ研究は一時期のブームが去り，行き詰まってきている。一方，古典語では，あいかわらず盛んで，質の高い個別論がいくつか見られた。

大鹿薫久「「ベシ」の文法的意味について」（森重記念）。個別論の領域を超えて，叙法体系論の本質に届いている。「断定」「推量」という用語を意味の面だけでなく，「構文上の特徴や性格が説明できる文法概念として」規定する必要を説く点は特に重要である。現代語研究者にも一読を勧めたい。大鹿論文に関連して，二つの論文を挙げておこう。まず，川村大「事態の妥当性を述べるベシをめぐって」（東大論集）。疑問，否定という環境において緻密な分析を展開する好論である。仁科明「見えないことの顕現と承認――「らし」の叙法的性格――」（『国語学』195,1998.12）。意味と構文機能を統合する視点はよいが，「通常の断定」と「特殊な断定」の相対化が十分説明されていない。また，小松論文[注6]では取り上げる，「なり」「見ゆ」との関係が扱われておらず，それが終止形分出の議論の不十分さをもたらしている。他には，福田嘉一郎「説明の文法的形式の歴史について――連体

ナリとノダ――」(『国語国文』67-2,1998.2)，中田幸子「希望表現の歴史的変遷――「まほし」「たし」「ばや」に関連して――」(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』6,1998.9)，矢島正浩「一八世紀初頭上方文献における意志・推量の助動詞の諸形式の用法」(『国語国文学報』57,1999.3)，鶴橋俊宏「為永春水の人情本に於けるダロウ・ノダロウ」(『日本文化研究』10,1998.3)，森脇茂秀「終助詞「かし」をめぐって――中世後期を中心に――」(『山口国文』22,1999.3)，長崎靖子「江戸語の終助詞「さ」の機能に関する一考察」(『国語学』192,1998.3)，土岐留美江「江戸語における連語「そうにする」の機能」(『文学・語学』163,1999.5) が注目された。

モダリティの基礎論としては，尾上圭介「一語文の用法――"イマ・ココ"を離れない文の検討のために――」(東大論集) を挙げておきたい。同「南モデルの内部構造」(『言語』28-11,1999.11)，「南モデルの学史的意義」(『言語』28-12,1999.12) もある。文法研究を進めていく上で，基礎概念を問い直すことが，いかに重要であるか感じずにいられない。

3.4 格・ヴォイス

格についての論文は多いが，ヴォイスについては，あまり活発でない。

近藤泰弘「平安時代の「をば」の構文的特徴について――『源氏物語』の用例を中心に――」(東大論集)。「をば」の構文的特徴について，「を」の対格性，「は」の主題化機能と対照させながら論じる。新しい構文現象が提示され，面白い。最後に「をば」特有の構文規則を想定するが，証拠として挙げる用例は異文があり，確例とは認めがたい。山田昌裕「『続狂言記』における主格表示の「ガ」と「ノ」――『大蔵虎明本狂言』『狂言記』との比較による」(『青山語文』29,1999.3)。非対格性の問題なども含めた広い視野からの妥当な分析と思われる。今後は，助詞φの場合とともに，ガ，ノの上接語についての分析も必要ではないか。奥村彰悟「江戸語における「へ」格・「に」格――『浮世風呂』の登場人物別使用傾向――」(『筑波日本語研究』4,1999.10)。登場人物の位相差による使用傾向に注目する点は興味深い。矢沢真人「「へ」格と場所「に」格――明治期の「へ」格の使用頻度を中心に――」(『文芸言語研究　言語篇』34,1998.10)，吉岡徳子「『今昔物語集』における「持ち主受身」についての一考察」(『梅花日文論叢』6,1998.3)，田口久美子「近代における非情物主語の他動詞文について――非情物主語の意味的変遷から――」(『国文目白』37,1998.2) も注目された。

3.5 副詞類（不定語など）

井上博嗣「古代語における陳述副詞について――「よも」の場合――」(『女子大国文』123,1998.6)。同「古代語の陳述副詞について――「ゆめ」「ゆめゆめ」「ゆめに」「ゆめにだに」「ゆめにても」「ゆめにも」「ゆめばかり」の場合――」(森重記念)。開拓的意義は認めるが，今後他の方法との接触が必要となろう。高山善行「中古語の叙法副詞――カナラズの構文機能と意味――」(論究7)。現代語の叙法副詞との対照という視点は注目される。ただ，カナラズと否定との関係につい

ては，塚原鉄雄の研究を乗り越えられていない。山口堯二「反語副詞『なにが』の形成」（『仏教大学文学部論集』82,1998.3）。反語表現の成立を考える上で有益である。従来，疑問表現の研究は多いが，反語表現については全く不足している。越智隆伸「不定語イカデの疑問用法をめぐって」（『語文研究』85,1998.6）もあった。不定語に関しては，やや専門的ではあるが，西垣内泰介『論理構造と文法理論――日英語のWH現象――』（くろしお出版，1999.3）が必読だろう。疑問用法だけでなく，量化表現としての側面も重要である。現代語の疑問文については，安達太郎『日本語疑問文における判断の諸相』（くろしお出版，1999.6）があった。

3.6　存在詞・コプラ

この分野は好論が多く，それらを通してアリの重要性を再認識させられた。

釘貫亨「完了辞リ，タリと断定辞ナリの成立」（『万葉』170,1999.7）文中用法に着目する視点が鋭い。他のアリ系助動詞の成立にも論が拡大されることを期待する。内田賢徳「存在詞アリの意味と述語性」（森重記念）。アリの本質を意味の面から掘り下げていて参考になる。他には，信太知子「「である」から「ぢゃ」へ――断定の助動詞の分離型と融合型――」（『神女大国文』9,1998.3），金水敏「近世江戸・近代共通語の「いる」と「ある」」，「近世・近代上方方言における存在表現とアスペクト表現――大阪落語SPを中心に――」（以上，上方語）が興味深い。

3.7　複文（条件表現，接続法など）

小林賢次「完了性仮定と非完了性仮定の分類について――補説・大蔵虎明本狂言の「タラバ」――」（『人文学報』301,1999.3）。著書に対する，大鹿薫久の批判に答えている。私見では，「一般的・普遍的」と「具体的・個別的」の対立が重要で，Stage-LevelとIndividual-Levelの対立[注7]に通じると思う。他に，岡本祐子「古代語における思考動詞の条件表現について」（お茶の水女子大学『国文』89,1998.7），馬場由佳「源氏物語における「未然形ば」と「ずは」「くは」」（岡山大学『国語研究』12,1998.3）があった。

3.8　指示詞

現代語の研究に引っ張られたのか，指示詞の研究はかなり活発である。

近藤泰弘「中古語のレ系指示詞の性格――能格性の観点から――」（『国語学』196,1999.3）。古典語を現代語や他言語と対照させる方法が有効に働いている。ただ，「動作主」の概念は，通常と異なるように思われ，説明がほしいところである。岡崎友子「いわゆる「近称の指示副詞」について」（『語文』73,1999.12）。仮説検証法が実践されており，明晰な論である。同「指示副詞の歴史的考察――「カク」を中心に――」（上方語）も有益。李長波「日本語の指示体系の史的変化について」（『国語国文』67-12,1998.12）。上代語を中心とした実証的研

究。金水，田窪に代表される，現代語の理論的研究にも目を向けるべきではないか。

3.9 形態論（語構成，接辞など）

この分野は，「語彙（史的研究）」と重なるので，論文名を挙げるにとどめる。

岩村恵美子「ナシ（甚）型形容詞続考――上代～中世の例を中心に――」（語彙史17），青木博史「デカスの成立」（語彙史17），同「カス型動詞の消長」（『国語国文』67-7,1998.7），近藤明「中古におけるウチ＋主体変化動詞の意味――源氏物語の場合――」（論究7），館谷笑子「助動詞タシの成立過程」（論究7），蜂矢真郷「カ型語幹の構成」（語彙史17），同「ヤク（ヤグ）・ラク（ラグ）」（語彙史18），こまつひでお「寝ラえぬに，恋ふラく考――疑似四段活用未然形語尾ラの消長――」（東大論集），村田菜穂子「ゲナリ型形容動詞――造語力拡大の様相について――」（語彙史18），吉井健「上代における不可能を表す接尾動詞――アヘズ・カヌ・カツ＋否定辞――」（井手記念）があった。

3.10 その他

これまでの項目にあてはまらなかった論考を一括して挙げる。

奈部淑子「平安時代の説話作品における「呼びかけ」の表現形式――「呼びかけ」のタイプと表現形式の対応――」（『筑波日本語研究』3,1998.10），広瀬満希子「『花暦八笑人』における命令法について――命令の受益の指向性――」（『鶴見日本文学』2,1998.3）は，いずれも難しいテーマをよくこなす。竹林一志「『徒然草』本文の一解釈――助動詞「き」「けり」・視点・表現効果の相関――」（『解釈』44-3,1998.3）。短いがキラッと光る好論。山田潔「春の色のいたりいたらぬ里はあらじ」（『解釈』44-11･12,1998.12）。解釈文法の面白さが出ている。

＊　＊　紙数の関係上，敬語関係の論文は割愛する。　＊　＊

4. おわりに――21世紀に向けての提言

最後に，21世紀に向けて，この分野に必要と思われる点を挙げておきたい。

○研究が活発になってほしい品詞

伝統的に，助詞，助動詞の研究に偏り，名詞，動詞の研究が不足している。語史，語彙史の研究はあるが，関心の違いからか，文法研究に繋がらないものが多い。その結果，「格」「連体修飾」等の研究に支障が出る。この際思い切って，新しい理論を導入するのも手である。名詞については「特質構造」（Qualia Structure），動詞については「語彙概念構造」（Lexical Conseptual Structure）の考え方が（それぞれの理論の妥当性の検証も含めて）試されてよい。[注8]

○他の研究分野との連携

新しい発想は，他の研究分野との接触から生まれてくる。たとえば，生成文法，認知

言語学との連携がさらに進められるべきだろう[注9]。文学研究とはもともと縁が深いが，本文研究の面でも連携を進めていきたい。伊井春樹編『本文研究　考証・情報・資料』第一集，第二集（和泉書院，1996.7,1998.3），山口仲美『平安朝の言葉と文体』「第一部第二章」（風間書房，1998.6）が注目される。情報処理の関連では，近藤泰弘「n グラム統計[注10]から見た古典語テキスト」（国文学研究資料館『第4回　シンポジウム：コンピュータ国文学　講演集』，1999.10）があった。規則の発見が期待できる分野である。

○研究人口の開拓，拡大に向けて

研究人口の開拓，拡大は，間違いなく学界の急務と言えよう。その点，小松英雄『日本語はなぜ変化するか――母語としての日本語の歴史――』（笠間書院，1999.1），小林千草『ことばの歴史学――源氏物語から現代若者ことばまで――』（丸善，1998.11）は，学問的な質の高さを示しつつ，若い人々をわれわれの世界へといざなってくれる。また，仁田義雄「研究者養成と学会の活動」（『国語学』200,2000.3）で述べられている提案について，実現を真剣に考えるべき時であろう[注11]。

注1　文法研究の総括として，金水敏「国文法」（『岩波講座　言語の科学5　文法』（岩波書店，1997.11）が秀逸である。史的研究に関しては，山口佳紀「総記」（「平成8年・9年における国語学界の展望」『国語学』193,1998.6），釘貫亨「日本語史の可能性と『国語史』」（『国語学』196,1999.3）をも参照。なお，北原保雄「文法論の進むべき道」（『文法的に考える』大修館書店，1984.4）は，今読み直すと味わい深い。

注2　近藤泰弘『日本語記述文法の理論』（ひつじ書房，2000.3）の刊行は，まさに画期的である。

注3　インターネット，Eメールを利用した情報交換も技術面の進歩と言えよう。なお，『日本語学』（19-6,2000.5）では「用例を探す」という特集を組み，小林賢次「総索引の利用――その実態と使い方――」がある。田野村忠温「用例に基づく日本語研究――コーパス言語学――」（「新・文法用語入門」『日本語学』19-5,2000.4）も興味深い。

注4　「連接構文」は，小松英雄『仮名文の構文原理』（笠間書院，1997.2）参照。「動的意味論」については，Heim, Veltman などの研究を参照。『岩波講座　言語の科学4　意味』（岩波書店，1998.3），赤間世紀『自然言語・意味論・論理』（共立出版，1998.9）参照。

注5　坂本勉「人間の言語情報処理」（『岩波講座　言語の科学11　言語科学と関連領域』岩波書店，1998.9），同「統語解析」（大津由紀雄編『認知心理学3　言語』東京大学出版会，1995.12）参照。文理解のプロセスについては，寺村秀夫「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」（『日本語学』6-3,1987.3，『寺村秀夫論文集II――言語学・日本語教育編――』くろしお出版，1993.2所収）がある。

注6　小松光三「助動詞「らし」の意味機能と表現」（愛媛大学法文学部論集文学科編16,1983.12）

注7　Carlson, G. 1977. Reference to Kinds in English, PhD. dissertation, University of Massachusetts, Amherst. 参照。

注8　Pustejovsky. J. 1995. The Generative Lexicon. MIT Press, Jackendoff. R. 1990. Semantic Structures. MIT Press 参照。影山太郎『形態論と意味』（くろしお出版，1999.4）が絶好の入門書となる。

注9　田窪行則「「伝統文法と生成文法の接点」総括」(『国語学』178.1994.9) に，「内観で資料が簡単に得られる現代日本語より，文献国語学の方が，生成文法との緊密な関係を持つことによって豊かな結果を得られるという可能性がある」という提言がある。「平成6・7年期の展望」が取り上げるが，あえて繰り返しておく。認知言語学との接触の場としては，評者が参加したものでは，「第7回CLC言語学集中講義」(於園田女子大学，1999.7.25-26)，「第2回認知言語学フォーラム」(於京都大学，1999.9.18-19) などがあった。

注10　長尾真編『岩波講座ソフトウェア科学15　自然言語処理』(岩波書店，1996.4) 参照。

注11　1999年8月，日本言語学会主催の講座が開催され，受講する機会を得た。国語学会主催の講座があってもよいのではないか。。

[付記]　文献の収集・複写にあたり，国立国語研究所所員の新野直哉氏，井上文子氏，小椋秀樹氏には，二度にわたってお世話になった。大阪大学文学部助手の内田宗一氏，阿部真弓氏にも，たびたび手を煩わせた。心より御礼申し上げます。

——大手前大学助教授——